

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 8 月 7 日 9:55AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 49,500～70,000 円
(TOPIX) 3400～4180

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,750 ドル
(S&P500) 6300～7800

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～30,800
(ナスダック総合) 20,700～27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～162.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～102.720

(次回号は 8 月 14 日(金)のリリース予定です)

エリオット波動とは

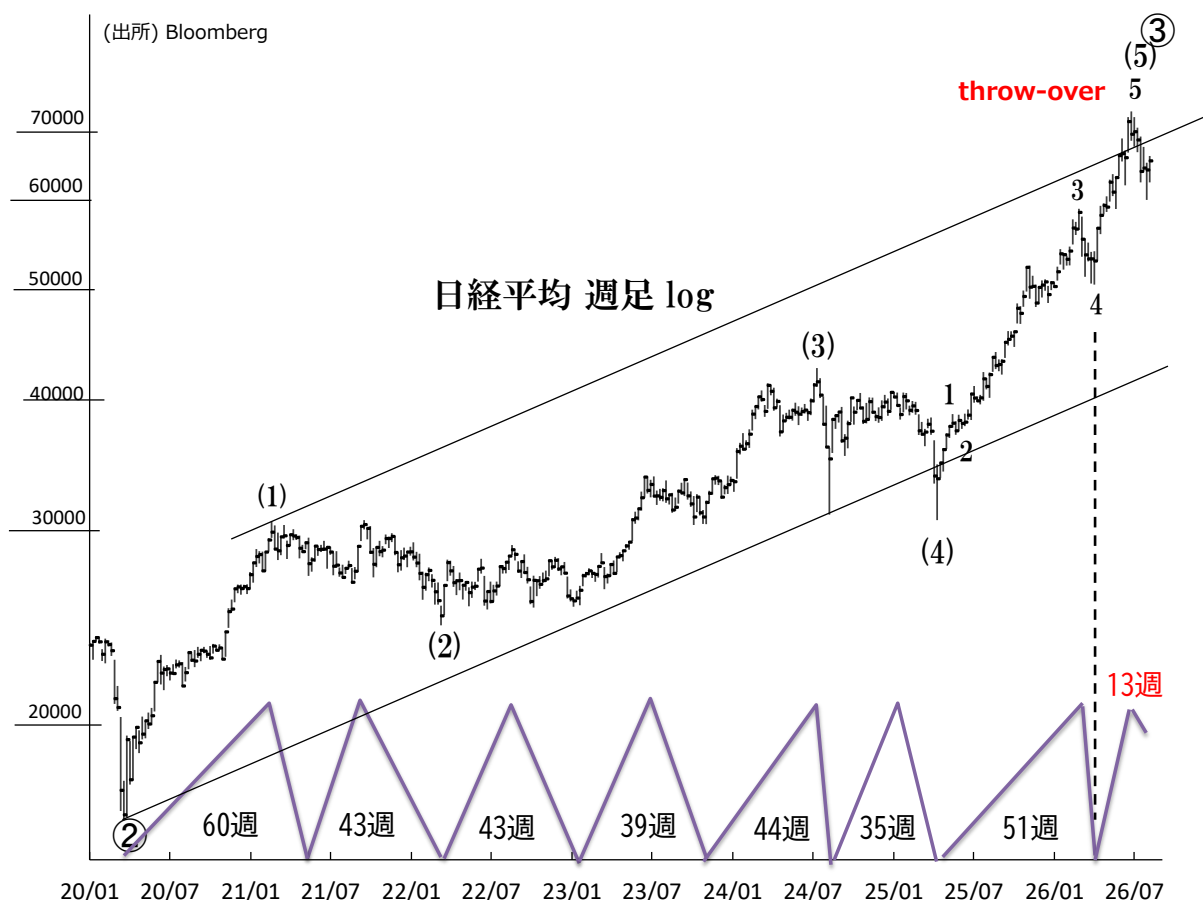
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22)はプライマリー第③波の天井であり、そこからプライマリー第④波の弱気相場が進行中とみられます。

3 月末(50,558 円)以来の現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きい(つまり上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。今サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が続くと予想されます。7 月 29 日に一時 60,448 円まで下げ、高値からの下げ率は 17%に広がりました。これは 25 年 4 月以降で最大の調整です(※2)

通常「レフト・トランスレーション」のパターンは、サイクル終点安値はサイクル始点安値を下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回らないことには現行サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。



[TOPIX]

日経平均の軟調さに比べ、TOPIX は対照的に強い展開を維持しています。それは今なお最高値圏に踏みとどまっています。

TOPIX には引き続き、高値更新の可能性が残されているように思われます。

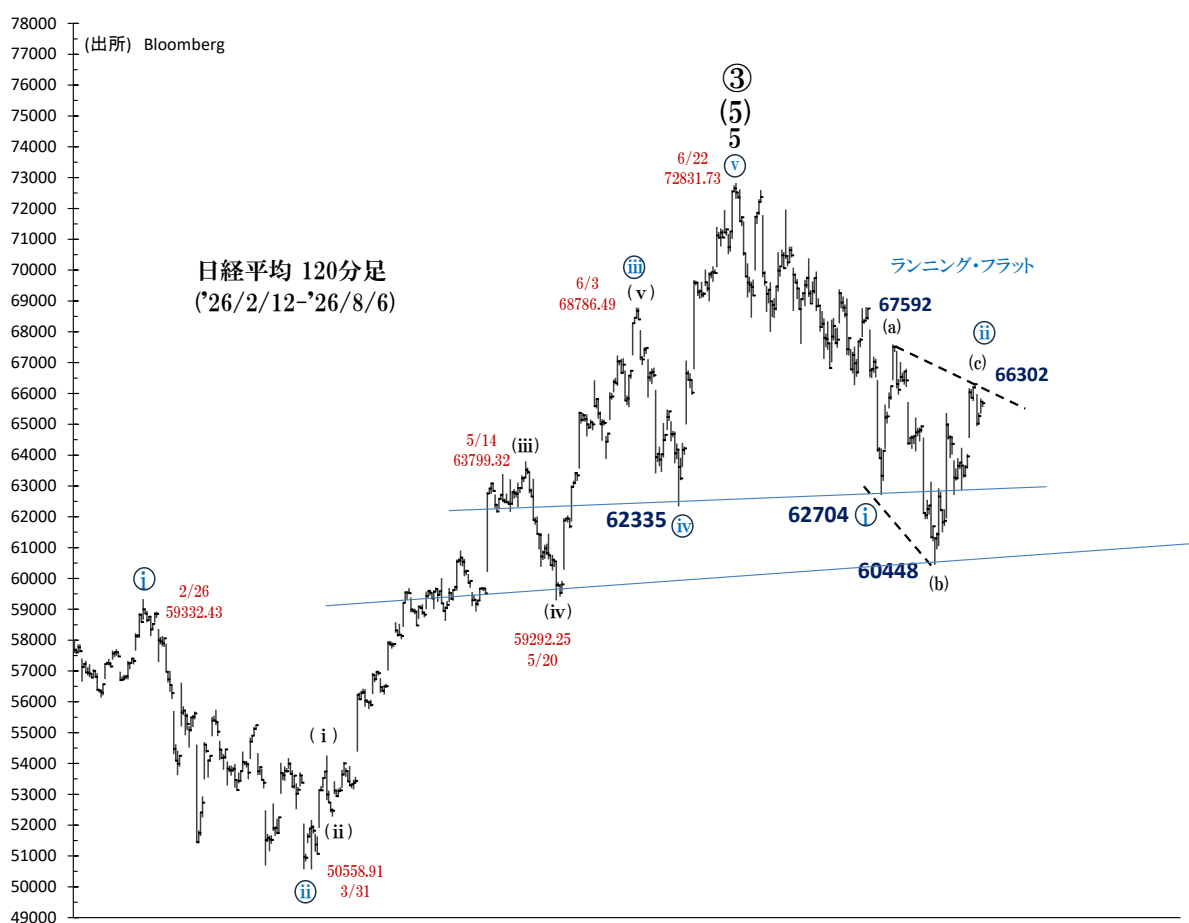
もっとも、プライマリー④波入りは遠い話ではありません。3859(7/17 安値)を割るとプライマリー④波入りの合図となります。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー第②波(2018 年 1 月～20 年 3 月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。それでも予想される日経平均の下落スケールよりは、浅めといえるかもしれません。

8 月も TOPIX 優位が続くかといえば、それは微妙かもしれません。

7 月末の日米協調による円買い介入は、久しぶりに株式市場に「円高リスク」を思い起こさせ、従来の円安を当然とする楽観ムードに水を差しました。

この先、例えば 1 ドル＝155 円割れが常態化するようだと輸出企業の業績悪化を考慮する必要があり、TOPIX も影響を受けるはずです。



[日経平均]

今回より、従来の波動カウントに若干の変更を加えます。

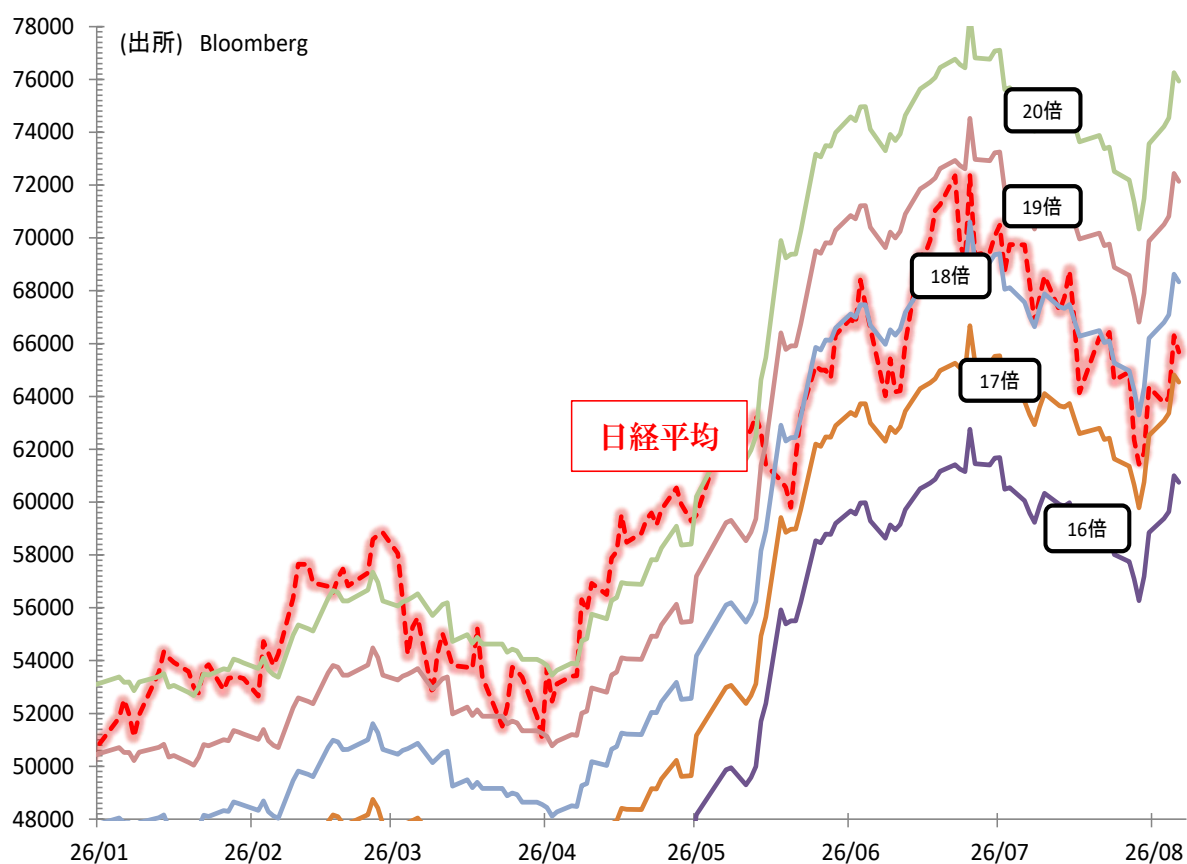
62,704 円(7/17 安値)を起点とするマイニュート級のマル ii 波は継続していました。それは今では「ランニング・フラット」(a)-(b)-(c)のパターンを鮮明にしています。

60,448 円からの上昇はマル ii 波における(c)波に当たり、その完成を以てマル ii 波全体が完成します。(c)波の長さは、(a)波と等倍～1.236 倍と想定され、これによると(c)波の終点は[65,336 円～66,489 円]と思われます。8 月 5 日の高値 66,302 円は、想定レンジを満たしています。

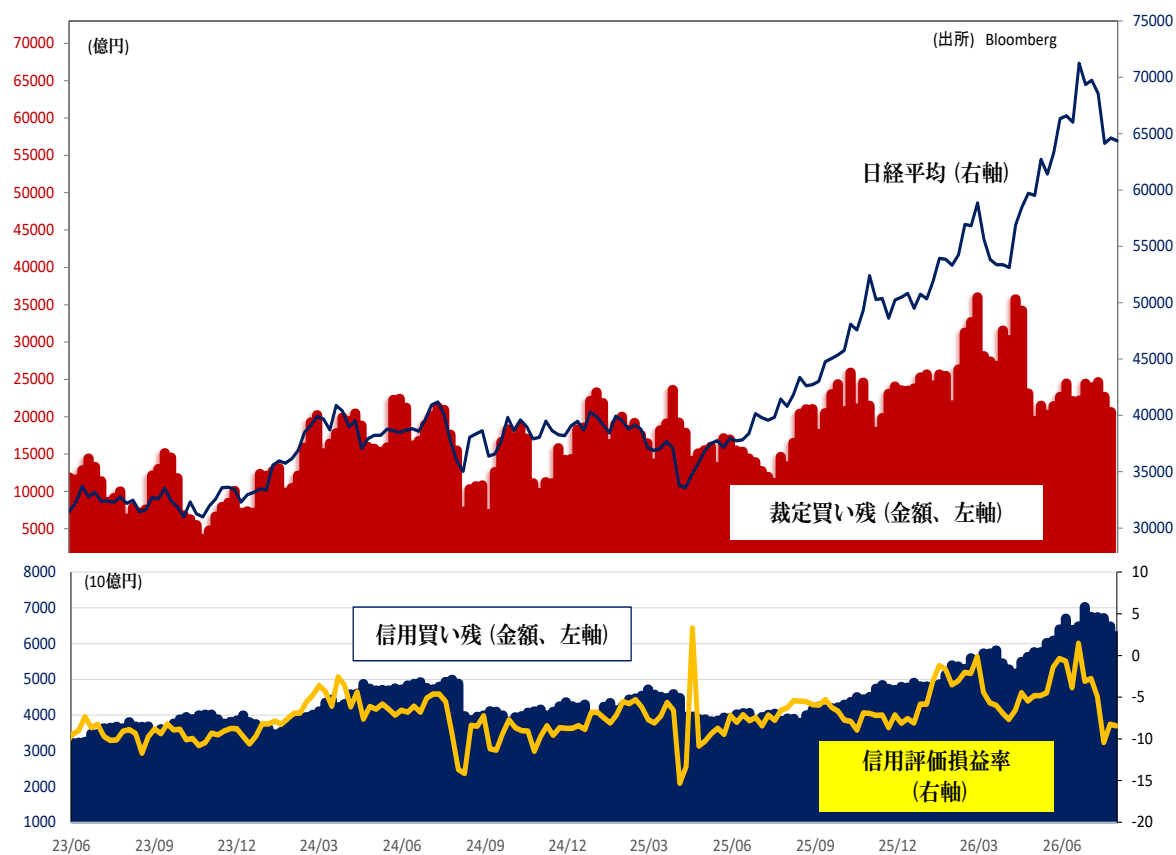
8 月 4 日-5 日のマドを埋めると—64,240 円でマド埋めです—マル iii 波による下落が始まったことを示唆します。このマル iii 波の下げ幅は、マル i 波の下げと等倍～1.618 倍がノーマル。よってマル iii 波は、およそ 1 万円～1 万 6000 円幅の下げに発展すると見込まれます。

[予想 PER 別の日経平均水準]

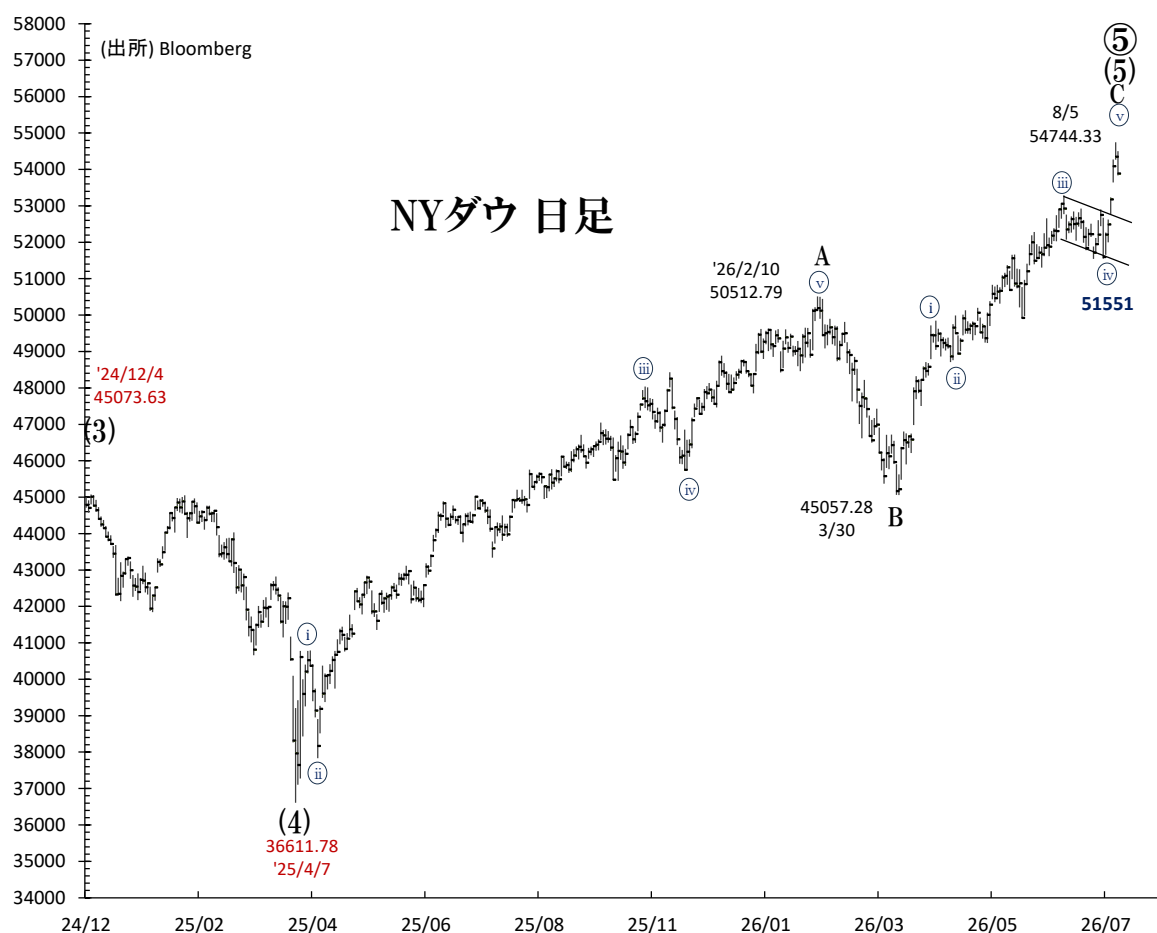
8 月 6 日の日経平均予想 PER は 17.30 倍、予想 EPS は 3796 円。過去最高の予想 EPS は 3922 円(6/25)です。



[裁定買い残と信用買い残] (7月31日時点)



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

8 月 4 日はギャップアップとなり、7 月 7 日高値(53,289ドル)を上回りました。翌 5 日には一時は高値 54,744 ドルを付けましたが、その後は利食い売りに押されました。なおこの日のローソク足に出現した、上ヒゲ長い「流星」は、短期的なピークアウトを暗示しています。

ダウ 30 は高値を更新しましたが、それは新しい上昇トレンドの始まりを意味するわけではありません。

ダウ輸送株平均の弱含みは続いており(チャート参照)、ダウ 30 との弱気パターン「未確認」は弱気相場 の接近を示唆しています。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

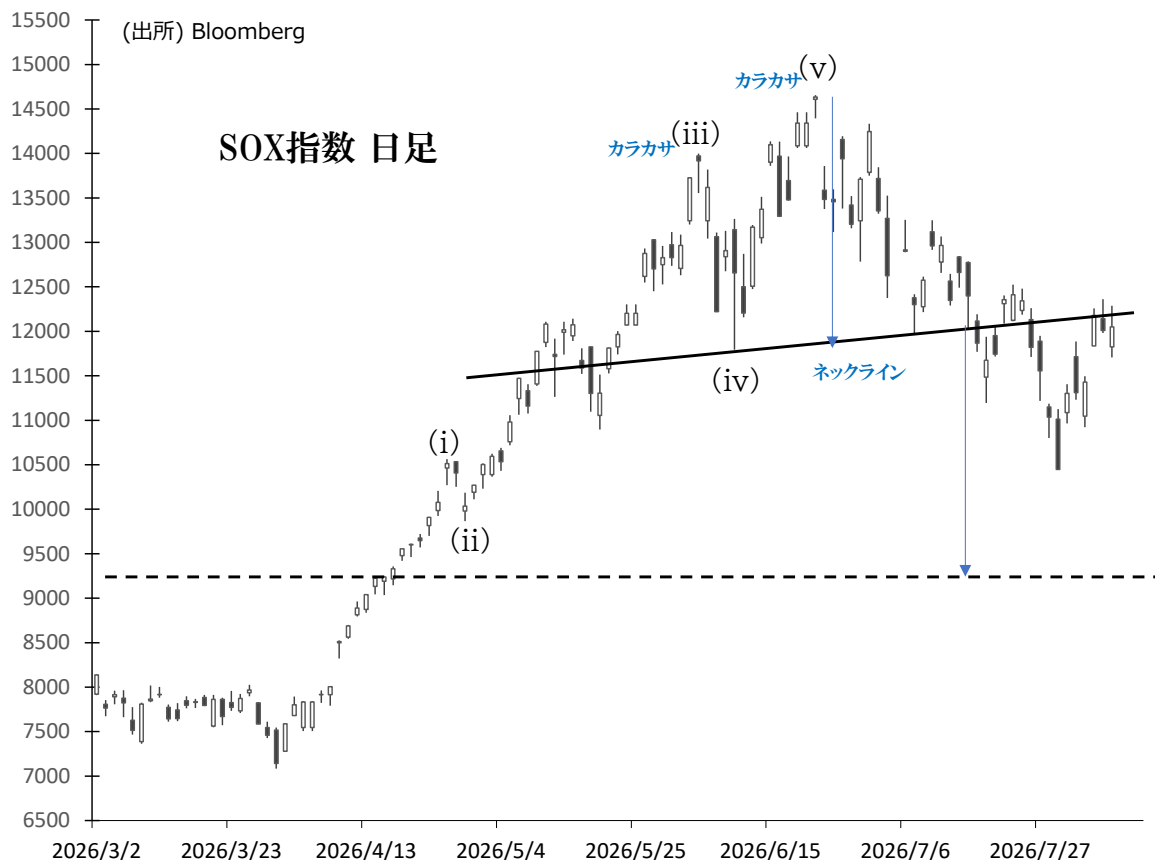
8 月 4 日に最高値を更新し、翌 5 日には一時 7793 とさらに上昇しましたが、終値はマイナスでした。

6 月から 2 カ月近くにわたる「トライアングル」は、マイナー級の第 4 波に当たります。この基本的に横ばいのパターンから上放れる波は、マイナー第 5 波に相当します。それは 25 年 4 月からの一連のマイナーウェーブにとって「最後の上昇」であり、その完成を以て S&P500 は強気相場のすべてを完成します。

SOX 指数

7 月 29 日安値は 10,445 です。これは、三尊パターンからの垂直計算から導かれる下値メド[9300-9500]には届いていません。

ダウ 30 と S&P500 は直近で高値を更新しましたが、SOX 指数の潜在的弱さは、米株相場全体に深い影を落としています。

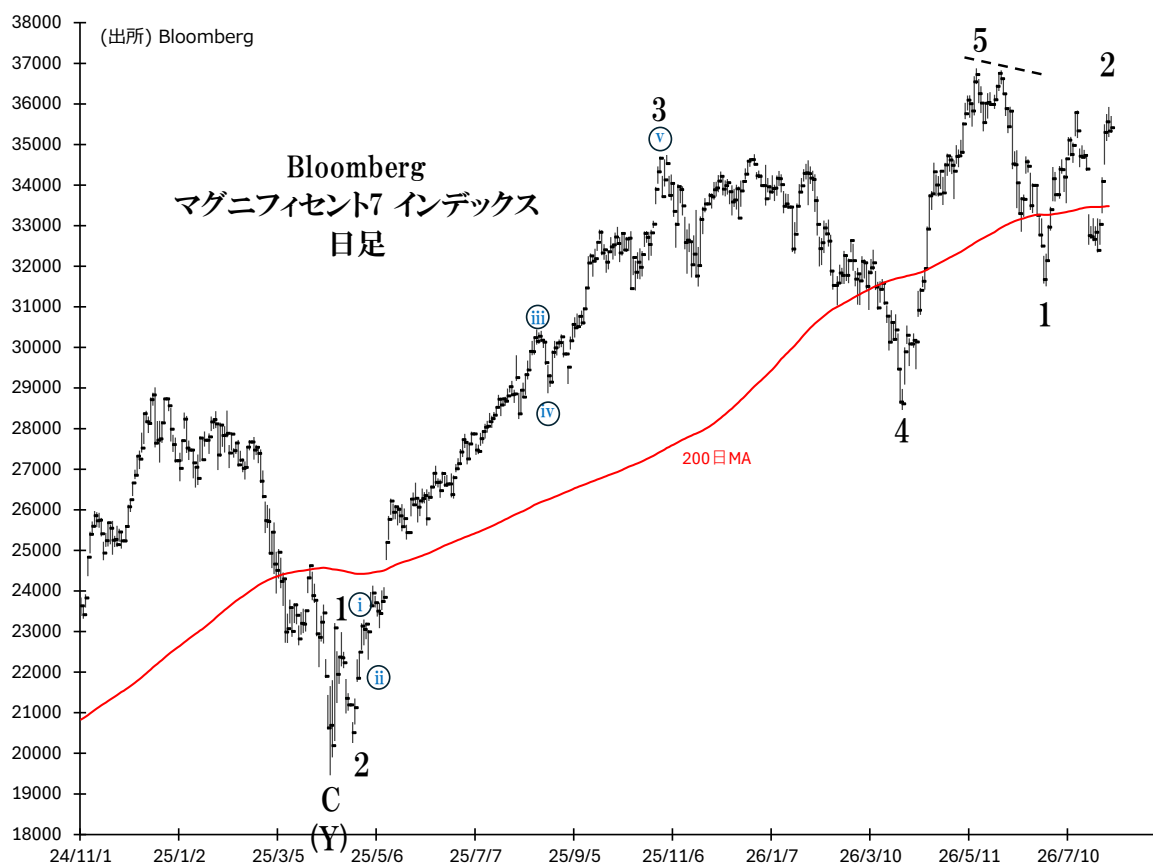


Bloomberg マグニフィセント 7 インデックス

マグ 7 は 5 月 14 日に最高値を付け、他の主要指数より先行して高値を付けています。これは重要な天井パターン(未確認)です。

8 月 5 日は一時 2 カ月ぶり高値を付けましたが、上昇を維持することはできませんでした。

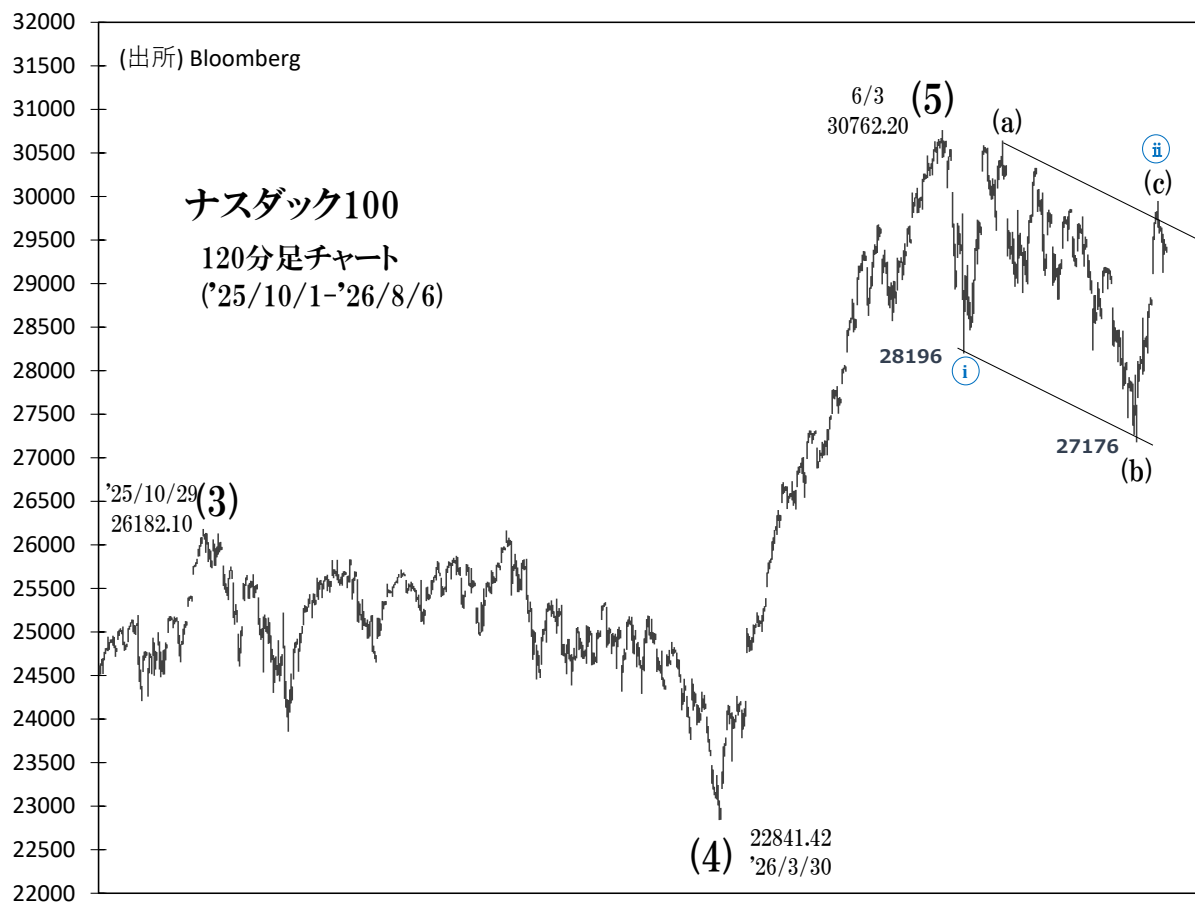
6 月下旬からの a-b-c パターンによるリバウンド・第 2 波は完成した可能性があります。そうだとすると、第 3 波の強力な下げが始まります。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

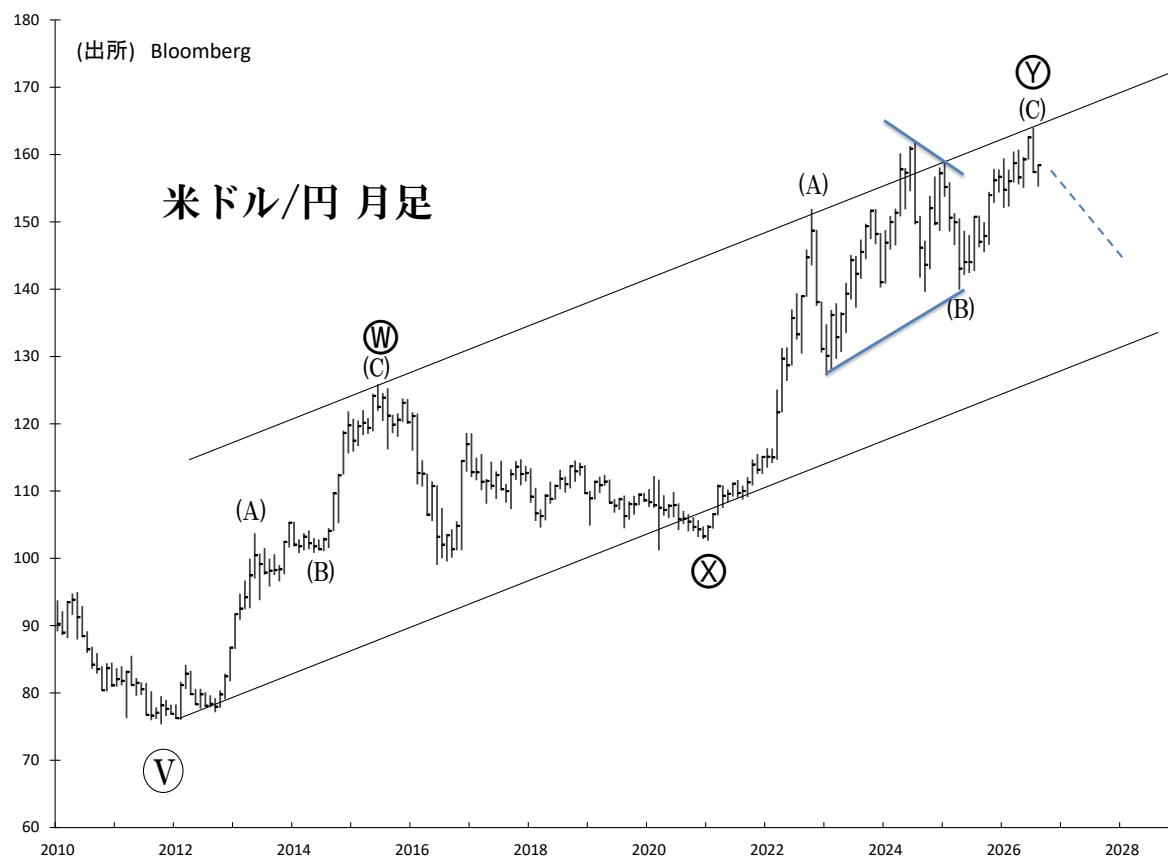
28,196(6/9 安値)からのマル ii 波は、「ランニング・フラット」(a)-(b)-(c)を描いています。

27,176(7/29 安値)からの上昇は、マル ii 波中(c)波に当たりパターンを完成させます。

8月5日高値(29,946)は6月高値からの下げ0.764 リトレースメントに一致し、マル ii 波完成の条件をクリアしています。

マル ii 波完成後はマル iii 波による下げに移りますが、それは 27,176 を大きく下回るものになるでしょう。現時点で算出されるマル iii 波ターゲットは[26,250-25,796]です。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在1ドル=141円程度です。日本円は1年以上も、金利差からの妥当な水準より極端に過小評価された状態です。

購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで1ドル=97円～103円です。長期的にも日本円は著しく過小評価されています。

163.944円(7/23)を以て、通算5年間のY波[(A)-(B)-(C)]による円安はすべて完了したと思われます。この見方によると、この先は数年間にわたり円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7月末実施の15年ぶり日米協調介入(円安阻止の目的では28年ぶり)は、163-165円の「ベッセント・シーリング」を築きました。

今回の介入目的は過剰な円安を阻止することであり、円高トレンドへの転換を狙ったものではないでしょう。しかし円安の限界レベルがはっきり示されることの帰結として、これまで膨大に膨らんだ「円売り」を買い戻す大きなきっかけを与えるでしょう。



【日足 エリオット波動分析】

ドル/円の歴史を振り返ると、大きなトレンドが変わるときの最初のきっかけのほとんどは、為替介入それも協調介入でした(85年9月のプラザ合意など)。7月末の日米協調介入のインパクトは極めて大きいといえましょう。

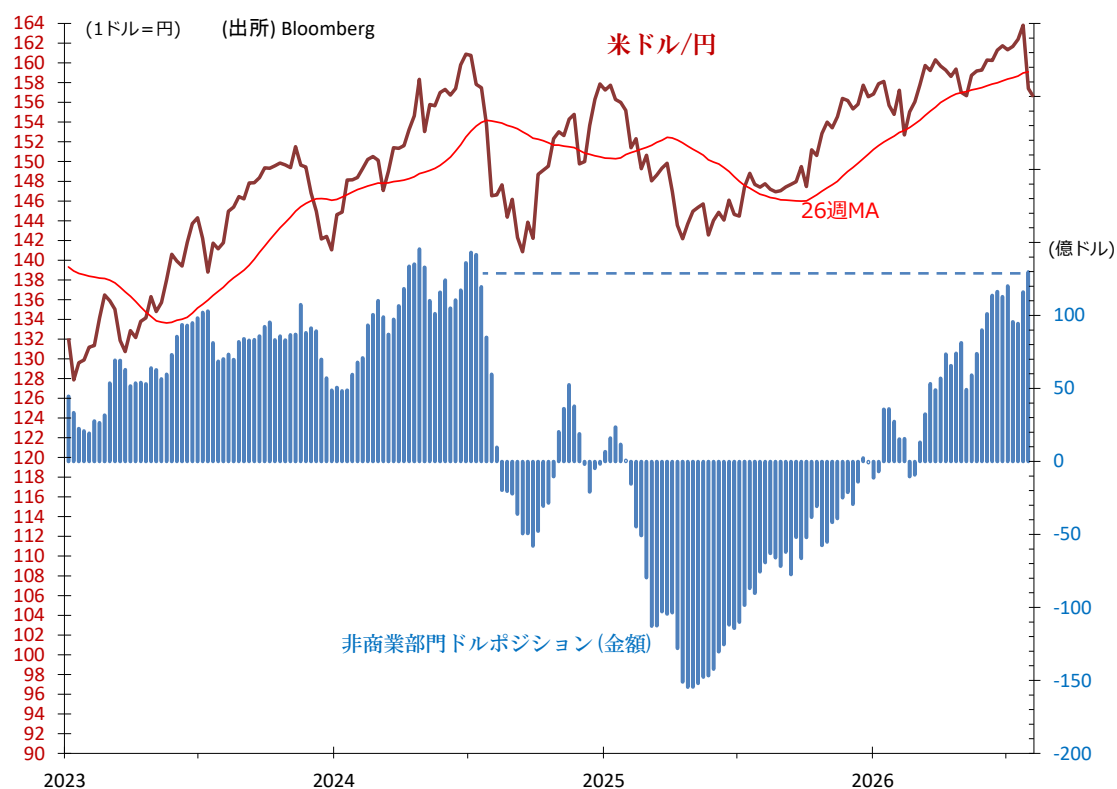
8月3日は一時155円台前半まで円高が進みましたが、レッサー・ディグリー第4波・154.983円の手前から徐々に円安となっています。7日には158円半ばを付けていますが、7月からの円高の0.382リトレースメント[158.513円]で戻りが完成するかを見てみましょう。

ドル/円の上昇には自ずと限界があり、基本的に円高が継続する可能性は高いといえます。155円突破は近いでしょう。

8月中に150円水準を試す展開も十分にあり得ます。

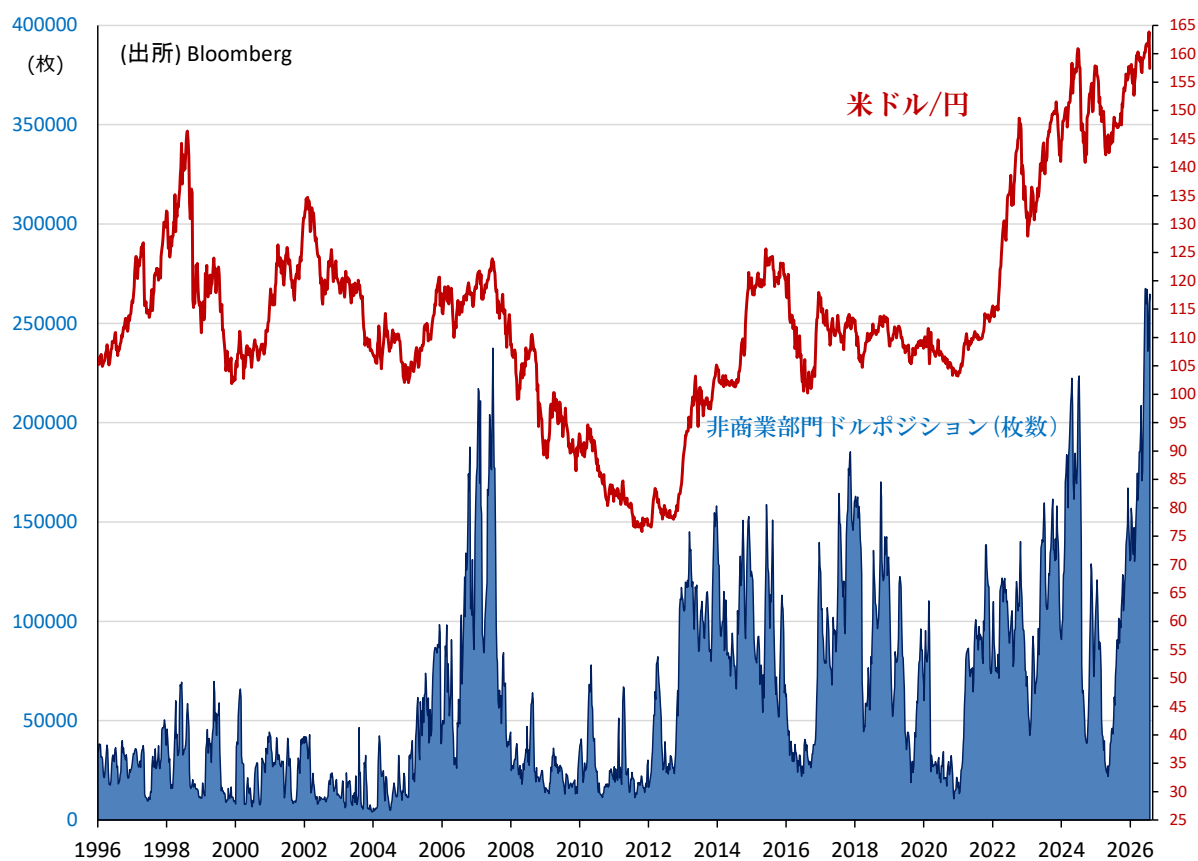
金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[141.870円]です。



円売り持ち高が2年ぶり高水準に拡大 (2026年7月28日時点)

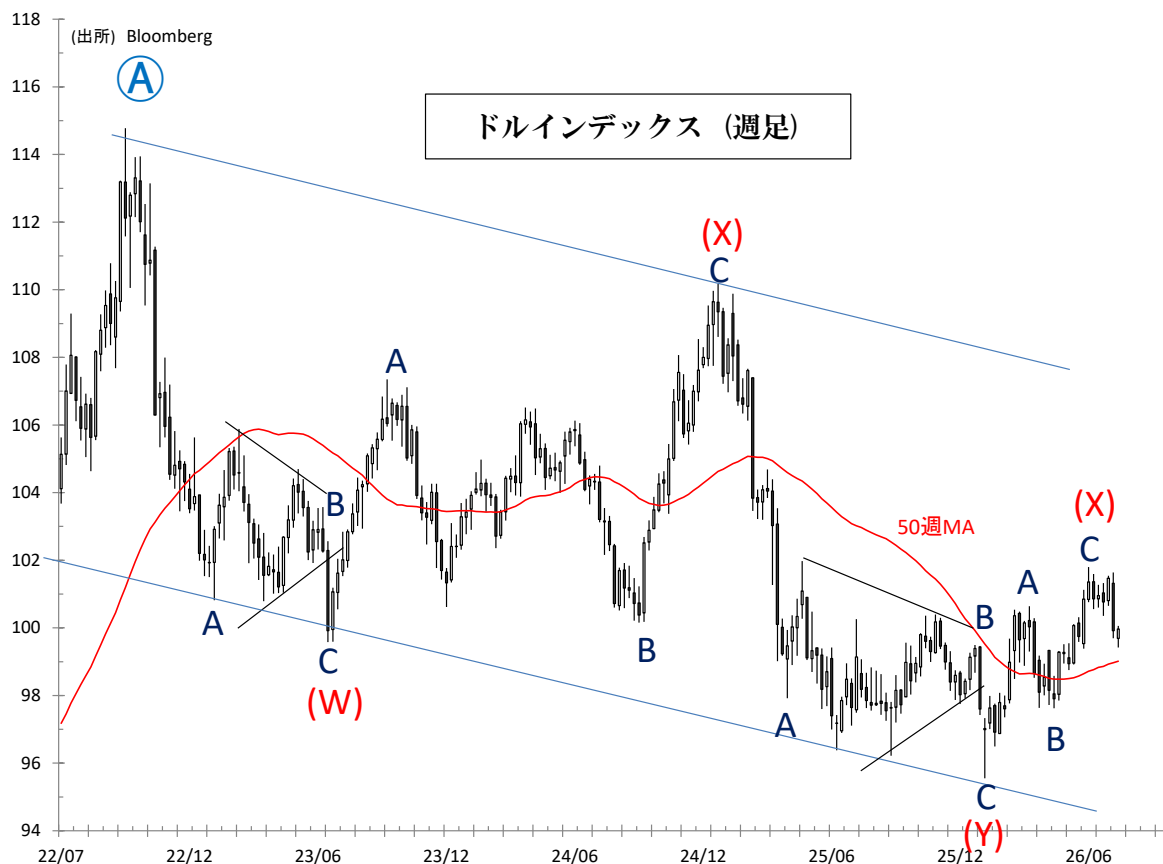
IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の116.50億ドルから129.77億ドルへ2週続けて拡大しました。これは2024年7月以来の高水準です。



円売り枚数は再拡大

7月28日時点の投機筋の円売り持ち枚数は26万4683枚でした。4週続けて拡大し、過去最高(26万7507枚)に近づきました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

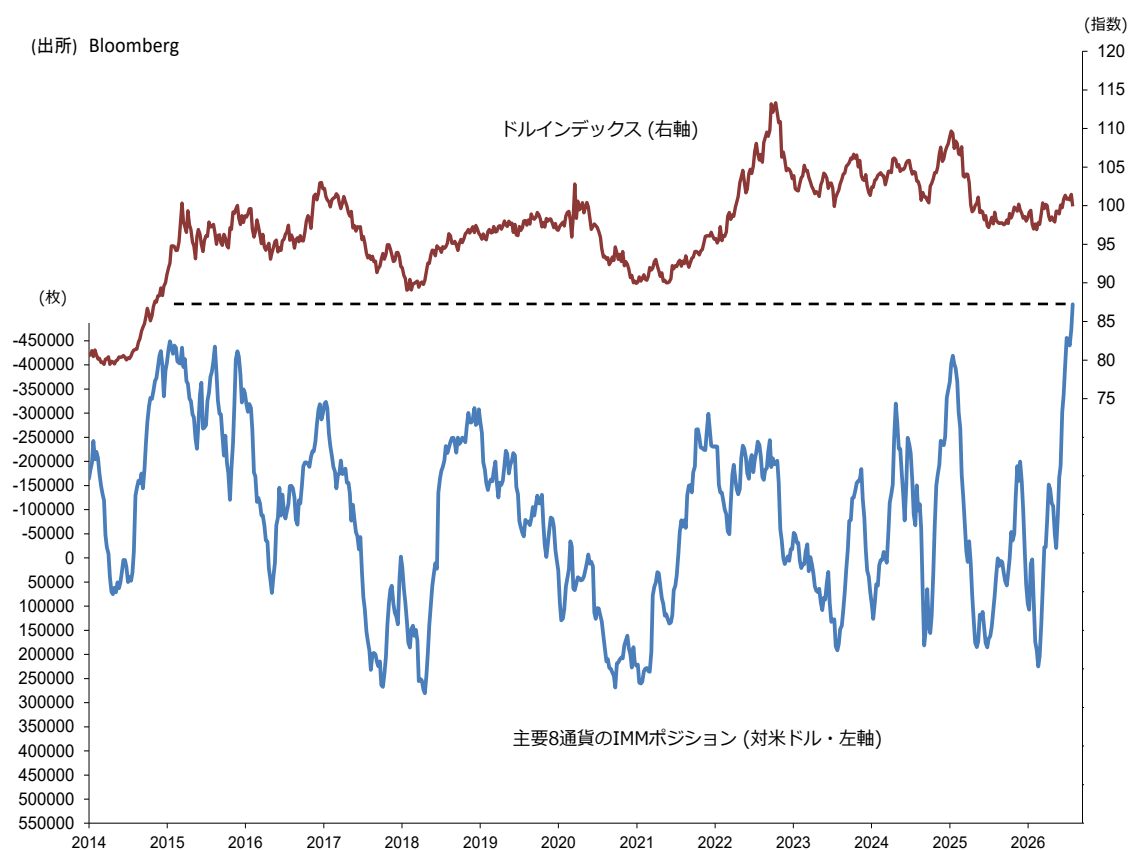
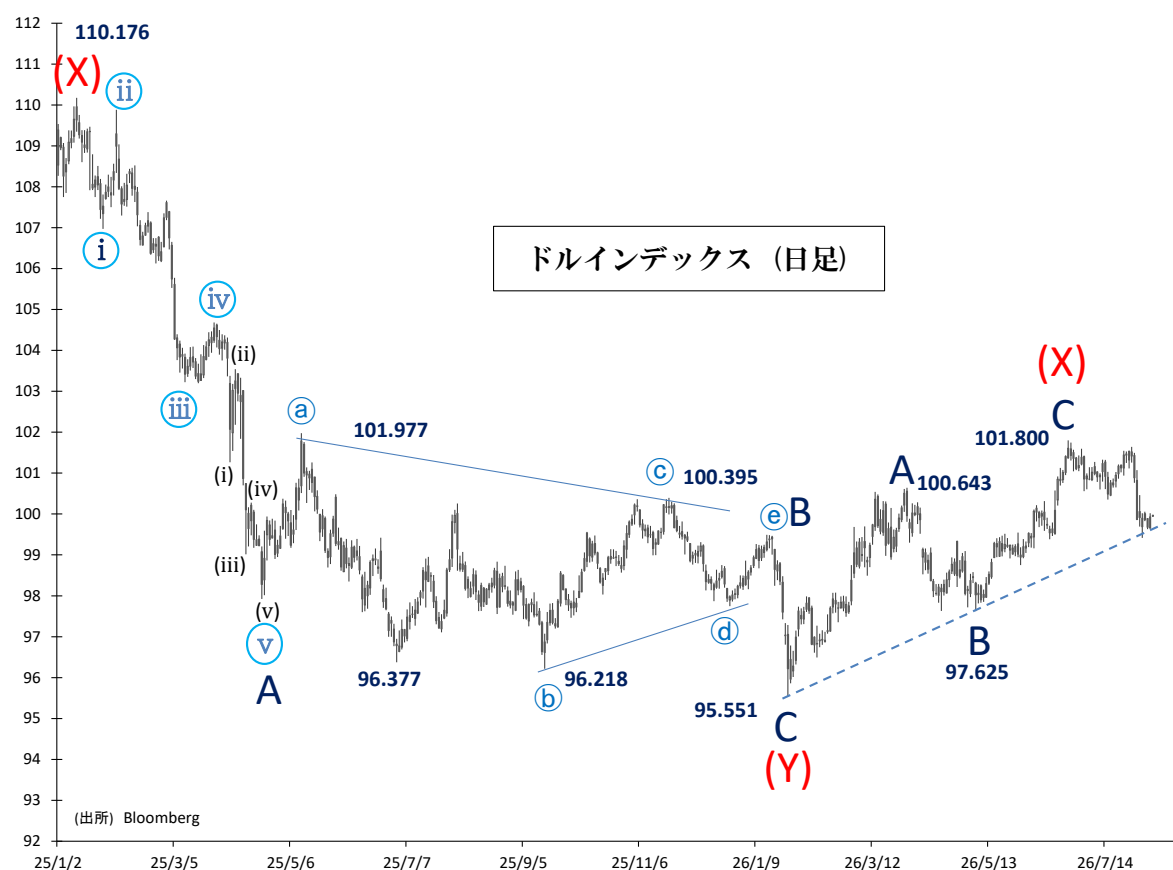
22 年 9 月高値からのドル安③波は、「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っているとみられます。長期タームの見通しは引き続きドル安です。

今年 1 月安値からのドル高は、③波中の(X)波であり、それが終わると、次は 3 番目のジグザグ(Z)波が展開されていく、と思われます。

6 月 24 日の高値(101.800)は、ターゲット[101.138-102.717]内で付けました。(X)波が終了したという見方が正しければ、この先も持続的なドル安になるでしょう。投機筋によるドル買いの極端な多さは、筆者の見方を裏付けているように思われます。

投機筋のドル合成ポジション買い持ち高は 2 週続けて過去最大を更新

投機筋によるドル合成ポジション買い持ち枚数は、7 月 28 日時点で 52 万 5546 枚へ拡大し、前週の 47 万 3669 枚を大きく更新。2 週続けて過去最大になりました。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
